ポケットモンスター虹 ～Raphel ?Quartet～

裏腹

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
頂点を極めし、四人の軌跡。

目次

Anecdote Runner ―― 1
Anecdote Diviner ―― 9

Anecdote Runner

空気がねじれた。
大地が抉れた。
その瞬間、瞳孔の散大を自覚した。
体に伝わる振動が、止まりかけの脈動を呼び戻して、意識を連れ戻す。
「すまない」
白黒だった世界に、再び色が付いた。
８つの輝きを集め、４つの試練を乗り越えた青年を冷たく突き放す謝罪。
目の前に転がるのは、旅路と苦楽を共にして、同じ夢を見て、走り続けた相棒だった。
「――……は？」
俺は今、何を見たんだ。
彼は今、何をくらったんだ。
白目を剥いたライボルトは、数秒前の事さえ語れない。
思い出せるのは、相対する男の、ただただ凍てついたその眼差しだけ。
人の旅を止める瞳。誰かの歩みを終わらせる目。
「威厳がない」だなんて、対面時に侮らなければ、事は変わったろうか。
そんなことはない。
生物に訪れる死のように。一方的に進み続ける時のように。そしてその中で犯した罪のように。逃れられないものだった。
悪い夢、酷い夢と、儚い夢――――立ち向かう者の意志も、過程も、はじまりすらも無意味と否定する黒竜（リザードン）が、徒に歯向かうだけの愚者を見下ろす。
「……んだよ、そりゃ」
「アドニス、最後のポケモンを」
「オレは今、何を――」
「アドニス！」

審判に促されて送り出すライチュウだが、呆然自失なアドニスには、彼の背中などまるで見えていなくて。
ただ漠然と、口を開いたまま、向こうのチャンピオン〝グレイ〟を遠くにするだけ。
圧倒的な差に、悪寒と薄ら笑いが止まらない。
全てを無に還す一撃で、わからなくなった。手も足も出す前に、エースが葬られた。
「終わらせよう――〝だいもんじ〟」
自分は、何のためにここまで来たのか。
何をするためにここに立っているのか。
積み重ねた記憶。刻んできた足跡。思い描いた自分。
――何もかも、わからなくなった。

「青いな」
「うるせーなぁ、誰が青二才だ！」
「じゃなくて」
その色に過度な反応を示すのは、きっと自身の未熟さを知ってのことなのだろう。
青年は鼻息荒くするアドニスを、おあいにく様、といなして、高い空を指差す。いくら若くても、皆まで言う必要はない。
ジョウトの中でも一際有名な地、エンジュシティの最も高い場所『スズの塔』の頂上にて望む景色は、格別であった。
修行の合間の一休みは、青年二人の言葉を多分に引き出す。
「バードウォッチングかよ……たいした涼し気で、余裕で、呑気だな。そりゃアンタの強さからくるものって考えでいいのかい」
「そうとも言うし、そうでないとも言えるね」
「みみっちいな。結局どっちなんだよ」
「当たらずとも遠からず、って言ったのさ」
最初っからそう言えっての。これは、音として発されない言葉。
「伝わる表現を考えていたら、微妙なニュアンスになってしまったね。ごめん」

「なんで聞こえてんだよ……」
　いくら修行で、見えざるものが見えるようになっているとはいえ、心中まで見透かされてはたまらない。
「その……千里眼？　とかいうトンデモ能力も、ジムリーダーとしての実力も、タネも仕掛けもない、と」
「それは、その通りだね。理想や夢に近道はない――それを叶える強さも同じ。君だって、ポケスロンを極めるにまで至ったアスリートだ。僕たちにできることは、ひたすらに己を鍛え続けることだけだって、わかってるはずだよ」
「ああ、正論だな。まったくもってわかりやすいぜ。けどな、徹しきれないのも、人間だ」
　何度この地に足しげく通ってみても、塔の上で寝そべってみても、胡坐をかいてみても、連日、体が動かなくなるまでバトルをしてみても――。
「見えねえんだよ、結果が」
　また、寝そべる。口をへの字に曲げて、ふてくされた子供のように。或いは、床に落ち伸びる雲影のように。
　ポケスロン頂点の次に、と始めたポケモンバトルは、大いにアドニスを悩ませて。
　何をしても勝てない。何をしても頭打ち。手を変え、技を変え、心を変えたこともあった。それでも求める栄光は、霧の中。
「ほう」見つめた後、隣で腰を下ろすのは、傾聴の合図。
「別に、努力が嫌いだなんて言ってねえ。だが、あんまり先の見えねぇ話も好けねぇんだよ。オレも、こいつらも」
「初心者みたいなことを言うね」
「気が短くてな」
「ああ、確かに短気だね。それでいて、天才だ」
　心底、訝った。小馬鹿にされている感覚さえも得たが、彼の性格を考慮し、真面目な発言なのだと納得させる。
「努力の定義の仕方が、ね。いつも報われてきた人のそれだ」
「どういう意味だ？」

「努力の仕方が上手いのか、それとも地力が備わってたのか――定かじゃないけれど、世の中にはどれだけ頑張っても、挫折するしかない人もいる」
「それに比べりゃ、オレは恵まれているとでも言いたげだな」
「逆だよ。小さな一歩の積み重ねの価値がわからないのは、とても勿体無いことさ」
　何が言いたい？と聞こえてきそうな表情に、さらに言葉を重ねる。
「夢を絶つ人は、何もたった一度のきっかけで折れる訳じゃない。それよりも前に、何度も、何度も苦境に喘いで、それでも立ち上がって、ちゃんと前へと進んでいる。……何が彼らをそうさせると思う？」
　自分で自分の背中を押し続けてきた、自分だけの記憶――そう、紡いだ。
「鍛練の日々は、それを育てていく」
　無意味に思える、負けるだけのぶつかり稽古も。息を切らす走り込みも。誰と戦うのかもわからない、技の空打ちも。
　アドニスはその穏やかな横顔を前にすると、それらを自然と許すことができた。
　倒れそうな時でも、膝を付かなかったのは、どうしてだった？
　下を向くしかなかった苦しみの中でも、その魂をもう一度動かしたのは、何だった？
「ジョウトだけじゃない――世界には、色んな場所があって、色んな人がいる。彼らは幾度となく、君の歩みを止めにかかるだろう。そうなった時、たとえ報われなくとも、その積み重ねは、いつでも君を再動させる」
　風に揺らぐ紫のマフラーとバンダナを、今でも覚えている。忘れるものか。
　ジムリーダーとして、己の迷いを断ち切り、道を示したあの男。霊使いの青年〝マツバ〟が言う。
「何をしてもダメで、どうしようもなくなった時は、振り返ってごらん」

――そこに、君の足跡があるよ。
「……！」
大の字に弾ける爆炎を、雷電が相殺した。
瞳を突き刺す閃光で、我に返る。ライチュウが反動で地に着いた。
大丈夫か。そんな心配を胸に見合わせた瞳。
「お前――……！」
杞憂だった。バチバチと眩しく爆ぜる戦意が、水晶体の奥で諦めるなと激しく叫んでいる。
「――ああ、悪い」
俯く。自分が恥ずかしくなったから。
勝手に絶望して、勝手に戦意を喪失して、勝手に終わらせようとして。
追い込まれたことなんて、ここに来るまで数え切れないほどあるのに。負けたことだって、今に始まったことじゃないのに。
最後の一体が、なんだ。体力がゼロに等しいから、どうした。
強者を恐れるな。自分達だって、強者だろう。刻んできた足跡は、始まりからずっと続いているのだから。
身構えるグレイとリザードンへと向き直った男から、先ほどまでの弱さは、消え失せていた。
「危なく、チャンピオン戦で醜態晒すとこだったなぁ」
再動――ライチュウがもう一度浮き上がり、ボード状の尻尾に搭乗、
「〝エレキフィールド〟」
アドニスの呟きを肯い、フィールドの中心に巨大な雷を招来する。
轟音に続くのは、煌めく雷光。放射状に拡がって、場全体をシャインイエローに染め上げた。
ぱち、ぱち、と会場を迸る電気が、エレキフィールドという力場を明確に知らしめる。
「……わーってるよ。行けるとこまで、だろ」
二人で見据えるのは、王座。体は動く。声も出る。視界だって開けて、空気も澄んでいる。

倒れるには、あまりに早すぎる。潰えた仲間の願いを乗せた背中に、自分の勇気を、ひとかけら。
規模も勢いも桁違いな、恐らくラフエル最大級の〝だいもんじ〟が、またライチュウの輪郭を歪ませにかかる。
「さあ、奔り抜けようぜ――マイバディ!!」
「!?」
消えた。
グレイがライチュウの残像を見たのは、リザードンが呻いてからの事であった。
「速い!」
片翼を焦がす雷撃。〝エアスラッシュ〟、振り向きざま。
文字通りに空を切る。
ビュンという風切りと、バチンという炸裂音が、彼への道しるべのはずなのに、捉えられるのはいつでも光芒だけ。
右を見て、左を向いて、上を睨んで、下を覗いて。翻弄されるリザードンを、空気の燃えかすが軌跡となって嘲笑う。
「この速度、捕まえられない……!」
「当たり前だろ。オレ達はこれ一本でやってきた! 何より速く! 誰より先へ!」
強烈な炎は、的が見えざるが故にかすりもしない。
一撃当たれば終わりなのに。そんな観衆の言葉も置き去りに、だいもんじの連打をすり抜けた。
特性『サーフテール』を持つライチュウにとって、エレキフィールドは単なる『でんき技を強化する舞台』ではない。
「早く! 速く! 疾く! 捷く! 迅く! まばたきも許さず全部置き去りにするッ!!」
力場から放出される微弱な電気エネルギーさえも推力に変換し、すばやさを倍化させる。そこから生まれる機動力は、もはや瞬間移動に等しい――。
急制動と急加速、ジグザク軌道と流線機動。まるで我儘な龍のように、雷電は空の波乗りで縦横無尽に暴れて回る。

「〝10まんボルト〟！」リザードンが、すれ違いざまの反撃を浴びた。もう一つの翼も焼かれると、たちまち甘くなる空中での姿勢。
アドニスとライチュウは、その僅かな瞬間を見逃さなかった。
「浚えよッ！」
ひときわ強い閃光。ボード状の尻尾で突撃し、勢いのままリザードンを上空まで連れ去る。
そうして黄色い流星が重力に逆らうのを辞める時、地表の電気は唸りを上げて、蠢き始めて。
天高くで円を描いたのを合図に、今度は真っ逆さま。隕石よろしくリザードンを一気に地上へと運び込んだ。
アドニスは瞳を大きくしたグレイへ、ようやくツラが変わった、と不敵に笑う。
「まだこっからだろ。見下ろしてんじゃねェぞ、チャンピオンさんよ……！」
「（なんだ、何をするつもりだ）」
「何もなしじゃ倒れられねェんだよ……こちとら背負（しょ）うもん背負（しょ）ってここ立ってんだよ！」
「――まさか！」
翼を焦がした竜が落ちてくる。麻痺に蝕まれた巨体が落ちてくる。
それを迎え入れるのは、地上の一点に集中したフィールドの電気エネルギー。
「最強だろうが、チャンプだろうが、関係ねェ！　今まで通り、やってきたことをやるだけ！　ただ、駆け抜けるだけ!!」
座標はばっちり。天へと伸びて、槍となれば準備は完了。
「リザードン！」抵抗を――今となっては発話の外だ。
「その玉座（イス）、よこせェェーーーーーーーーーーッ!!!!」
〝ライジングボルト〟。それは、黒龍を焼き討った雷槍（らいそう）の名。
エレキフィールドのエネルギーを限界まで集めて放つ、でんきタイプ最大級の技。
天上へと抗うように大地から昇る、反逆の霹靂（いかずち）。
「リザードン、戦闘不能！」

リザードンと入れ替わりで出したプテラを、すぐさまメガシンカさせるのは、他ならない本気の証明だろう。グレイは相対する者の目を、しかと見つめる。

呼吸を荒らげ、今にも倒れそうになりながら、それでも立ち続ける青年の、爛々と雷が輝く鋭い瞳を。

「……アドニス、だったね。覚えておこう」

「へん、足りねぇな……、二度と忘れられねぇ名前にしてやるよ」

進み続けた果てに待つ最後の一歩は、そこにあるか――――。

Anecdote Diviner

灰色に覆われる、空。突き刺すように降り注ぐ白雪と、水晶のような氷。
何も知らなければ綺麗だろう。美しい、と観測者は言うだろう。
ここが人の住めない星だなんて、気付かなければ。あらゆる生命が死に絶え、呼吸の止まった世界だなんて、わからなければ。
ただ一つ残った命――無を司る灰の竜が、凍り付いた大地で蠢き、宙空に向かって咆哮を上げた。
「……ッ」
ずきり、と瞳の奥が痛んで、たまらず目を閉じた。
水晶が見せる未来は、丸く柔らかな形状に反して、今日も今日とて辛く、厳しく、恐ろしい。
ショッキングな映像に意識をやられかけ、眉間に手をやる占い師。今に始まったことではないというのに、と独り言を漏らし、俯いた。
苦しげな主を思い遣り、ゲンガーは宿っていた水晶から現れ出た。
霧状の姿から本来の姿形を取り戻し、そっと占い師――サーシスに寄り添う。
「すまぬな……、心配ない。ありがとう」
荒い呼吸を整え、流れた冷や汗を拭いながら、への字に口を曲げたゲンガーを撫でた。
幼少の折、力を習得したその時から、長らく見せられ続けているラフエルの未来。その景色。
灰色のドラゴンが無尽蔵の冷気を以て全てを無に帰し、文明が、森羅万象が凍り付いていく。
有り体に表現するならば、それは世界の滅亡だった。
何かが変われば――――そんなことを漠然と思いながら未来を占い続けて、一五年が経つ。観測結果は今日も変わらず。
「孤独なものだな――、残ったのも我だけときた」
この未来を知っているのは、自分だけ。伝える相手も居はしない。まして相談だって。

サーシスの家系も、このラフエルの地、及び英雄ラフエルと無関係ではない。
代々、彼ら英雄の民に仕え、この世界の吉凶を占ってきた。のだが――。
『ラフエルを去るというのは、どういうことですか、父上』
『お前も、あの光景を見ただろう。終わりの時だ。英雄の加護は消え失せ、形骸化した伝説だけが残った。それだけのことよ』
『では、これまで彼らに受けた恩も、一族の誇りさえも忘れ、この地を捨てるということですか』
『サーシスよ、我ら〝プリンシヴァル家〟は視ることしかできぬ。世が、因果が用意した未来を、ただ他人より先んじて認知するというだけだ。何も優れてなどいない』
『非力であることは、逃げることの理由にはなりません』
『サーシス、愛しき私の一人娘よ。どうかわかってくれ。我らは、築き上げた我らの栄華を、そして紡いだ未来を、失いたくはない』
『……――――良いでしょう』
一族は現当主の彼女を除き、皆その滅亡の未来から逃げるように、ラフエルを立ち去った。
ただ『未来は変えられないのだ』とだけ、言い残して。
視た以上の責任、先見したが故の義務――彼女は自らの意志で、一族とは異なる道を選んだ。
それが、苦難を伴うものと、知りながらも。

◇　◇　◆　◇　◇　◆

わかっている。自分で残るという決断をした。何も後悔はない。
「お待たせ致しました、そらのはしらパフェ・メガレックウザエディションでございます。ごゆっくりどうぞ」
けれども疲れることはあるし、それでたまっていく鬱憤を解消することは許してくれ、と毎度のように思う。

ラジエスシティ、港沿いのカフェ。ストレスが溜まってしまった時は、いつも此処で巨大パフェを頬張るのが、サーシスの密かなルーティンとなっている。
仏頂面というのか、愛想の無い表情で黙々と食べ進める姿は、人目からではとても楽しそうには見えないが、本人にしてみれば、これ以上ないリフレッシュで。
「……ふむ」
生クリームとアイスクリームを一緒に味わったり、フルーツとプリンを同時に口の中で転がしてみたり。
大きくとも飽きの来ない味に、思わず夢中になってしまう。内心で何度おいしい、と唱えたかわからない。
「もぐ、もぐ」
「サーシスさん」
「もぐもぐ……」
「あの、サーシスさん」
「もぐ、もぐ、もぐ……」
「サーシスさん！」
口の周りにホイップの欠片。このような姿、彼女のプライベートを知らない者が見れば、さぞ珍しがることだろう。
「なんだ。今、取り込み中――――！」
少なくとも、
「サーシス、さん……？」
ラジエスシティのジムリーダー、ステラは、そうであった。

「奇遇ですね、私もここをよく利用するんです」
「……誰も聞いておらん。というか、勝手に相席するな」
「まあまあ、そうおっしゃらずに！　せっかくこうして休日にお会いできたんですし」
ふう、と、ため息まじりにスプーンを咥えながら、窓の向こうを横目で見やる。
一人の休日がよかったのだがな……とまでは、この屈託のない笑み

を前にして、言葉にはできなかった。
　ステラはしぶい顔で応対するサーシスをよそに、パンケーキを食す。
「ん、おいひぃ～……っ」続けざまに見える幸福度高めの表情に、自分も、もしかしてこんな間抜けな顔をしてパフェを食べているのか――なんて、コーヒーを嗜んで考えるサーシス。
「ふう……お買い物は、されましたか？」
「無論だ。そのために来た」
「雑貨屋の〝チェリムセレクト〟は品揃え豊富で、おすすめです」
「部屋で焚く香を買った」
「む……最近できたアクセサリショップ〝フワール・デ・アンシー〟は、手ごろなものから高級指向まで売っていて、多くのユーザのニーズに応えています」
「新しいピアスと指輪とブレスレットを購入した」
「さすがです。では、お花屋さんの〝フラージェス・フランジェ〟は」
「飾るものを注文済みだ。明後日に来るよう配送手続きをした」
「……しっかり女性らしいことをしている……」
「どういう意味だ！」
　口元に手をやり、大真面目な面持ちで思考していたあたり、素で驚いていたのだろう。
「ごめんなさい、サーシスさんのこと、あまり知らなかったものだから」
　両手を合わせた謝罪のジェスチャーと、ばつの悪そうな苦笑。ただただ調子が合わないだけだから、立てかけた腹を起こすのも馬鹿らしくなった。
「……呑気なものだな」
「？」
　嗚呼、本当に呑気だ。自嘲も込めた呆れ顔。
　明日、明後日ではないにしろ、遅かれ早かれ起こる出来事を何一つ知らないでいる。
　誰も彼もが、銘々に、ただの日常をなんとなく生きている。当然、目

の前で小首を傾げる修道女だって。
私も、そちら側ならばな――そんな可能性の話に、密かに花を咲かせて。そうして吹き飛ばす。
「――例えば。そう遠くない未来に世界が滅ぶとして、お前は何ができる？」
柄にもなく、文脈の繋がらない会話をして。じ、とその碧眼を見つめてみたりなんかして。
何をしているのだろう。気でも触れたか。大馬鹿だな。
「……戯言だ。何でもない、忘れろ」
早急に自戒して、言葉を引っ込めた。
「この後、お時間はありますか？」
それがもう遅いと気付いたのは、あまりにへたくそな、目の逸らし方をした瞬間のこと。
にらめっこから逃げなかったステラは、パンケーキをぺろりと平らげると、残りの紅茶を飲み干して、おもむろに伝票を手に取った。

◇　◇　◆　◇　◇　◆

「どこへ行く？」「いいから、いいから」そんなやり取りを挟んでサーシスが連れられたのは、ラジエス大神殿。
荘厳な佇まいにおずおずとしながら足を踏み入れれば、柔らかな明かりに照らされた広大な空間が迎え入れてくれる。ステンドグラスで彩られた廊下を通り抜け、着いた先は大広間。
レシラムとゼクロム、そしてラフエルの像が鎮座し、二人を無音と共に見つめている。
「……なんだ、これは？」
「何、って、ラジエス大神殿ですよ？」
「ではない。我を此処に連れてきた意図を答えよと言っている」
「『未来に世界が滅ぶとして、何をするか』――問いに対する私の答えが、これです」

「『ただ祈る』――と？」
「はい」
サーシスは呆気に取られた。あんな寝言じみた問いかけを大真面目に捉えて答える、というのもそうだが、何よりも、
「神頼み、か」
「ええ。私の本分でもあって……英雄神ラフエルは、お嫌いですか？」
「彼奴（きゃつ）を嫌うならば、我は今更ここに残ってはいまいよ――」
拍子抜け、だった。特段、何かをできるとも思っていなかった。
ただ、勝手に期待をしていただけで、そんな自分にも嫌気が差して。
「もしそれが本当だったとして――きっと、その時が来るまでは、何もできないです。私たちはみんなみんな、ちっぽけですから」
「無力故、何もしない、か」
「この世に、無力な者は存在しません。少なくとも、信ずる力は誰しもに宿るものですから」
「世迷言だ」
「いいえ。私はいつでも、生きている今、この瞬間に私ができる一番大きな事を、しているつもりです」
世迷言、戯言、譫言……横顔から向いた面持ちは確かに柔和なのだが、不思議と、否定の言葉を跳ね退ける強さを見て取れた。真面目に馬鹿を言っている、と表すのが、最も正しいのか。
「避けられるかもわからない大局にまで、思い巡らせなくともいい。ただ、一緒になって『明日はいいことありますように』なんて思ってみるだけでも、世界は違うものになるかもしれません」
「平和な奴だな……」
「よく言われます。でもきっと、ほんとは平和がいいんです。笑っているのが、一番なのです。あなただって」
「おい、触るな！　や、やめろ！」
「あら、とても素敵な笑顔ですのに」
両頬に人差し指を当てられ、口角を吊り上げられる。ステラもステラで、柄にもない悪戯をして、少女のようにくすくすと笑っていて。
「先を気にするのも、いいけれど……現在を疎かにするほど見つめて

しまうと、疲れてしまうわ」
「もっと楽にしろ、と言いたいのか」
「ええ、その通りです。だって未来が変えられないだなんて、誰も言ってませんもの」
サーシスは、は、と短く息を吐いた。
これまでの占いが、偶然すべて当たってきただけで――この先も当たるだなんて証明は、誰にもできない。囚われの使命に追われるばかりで、そんな簡単なことも失念していた。
そうだ、思い出した。私はなんでもない、小さきものだ。
「それに、私たちはちっぽけだけれど、孤独じゃない。いつでも誰かと繋がって、何かを為している。ラフエルが沢山の人やポケモンと、この地を創り出したように」
が――――それでいい。それがいい。
一人じゃない。馬鹿馬鹿しくなるほどにおめでたい聖女の笑顔が、そう言っている。
頭蓋の中でずっとかかっていた靄が、晴れた気がした。
背負ってばかりじゃ重すぎる。抱えすぎると転んじゃう。分かち合う仲間は、周りを見ればちゃんといて――。
「……フン。わかりきった事を。我が斯様な道理に、気付かんとでも思うたか」
「ふふ、だから悩んでいたのではないのですか？」
「馬鹿者が、悩んでおらぬわ。一言も言っておらん」
「あらあら。では、そういうことにしておきましょうか」
「まったく忌々しい奴め！　バトルの申し出ならば受けて立つぞ！」
「はいはい、まずはお祈りしましょうね。神殿内ではどうかお静かに」
「子供扱いするでないわ！」
この地は、一色だけではないから。自分だけのものではないから。
様々な人の色が乗った、みんなの世界だから。
虹の大地は、諦めるほど沈んではいない。

◇　◆　◇

◆　　◇

灰色に覆われる、空。突き刺すように降り注ぐ白雪と、水晶のような氷。

凍てついた大地の上で佇む凶獣に、立ち向かう影あり。

其の者、虹の光携え、止まりし時の中、唯一人、鬨の声上げる。

理想と真実を司りし二体の聖獣従え、世を蝕む虚無、焼き払わん――。